

ヨハネによる福音書 21 章 1 節－14 節
「湖畔に立たれる復活の主」

《1》

ヨハネによる福音書は最後の 21 章に入りました。ここでも、主イエス・キリストの復活の物語が続いています。

既に、主のご復活は起こっています。今朝の御言葉は、「その後」という漠然とした言葉で始まっています。そして最後の 14 節に、主が弟子たちに現れたのは、これでもう三度目である、とあります。

ただし、復活された主は三度だけではなく、もっと多く、弟子たちに現れておられます。例えば、エマオへの途上で二人の弟子たちに現れてくださいました（ルカ 24 章 13 節～）。

あるいはパウロはコリント人への手紙一で、復活の主が同時に五百人以上もの弟子たちに現れてくださった、ということを書いてあります（15 章 6 節）。——もっともこれは、今朝のティベリアス湖畔の出来事よりも早いのか、遅いのかはわかりませんが。

ですからヨハネがここで三度目と記しているのは、彼自身が記した福音書においては三度目である（復活の日の夕方、トマス以外の弟子たちに。また翌週、トマスを含む弟子たちに。今回それに続いて三度目）、ということです。

いずれにせよ、既に二度復活の主にお会いしており、今朝の出来事はそれよりも後のことであるのは明らかです。

既に弟子たちは主にお会いしています。どんな変化が彼らに起こっていたのでしょうか。彼らはイエスさまから使命を与えられていました。最初の時に、言われています。「父が私をお遣わしになったように、私もあなたがたを遣わす」。

遣わされるのは、伝道・宣教のためです。課題が与えられ、イエスさまから息を吹きかけられてもいます。

それなのに、今日のこの場面はどうでしょうか。——舞台はティベリアス湖。ガリラヤ湖です。あるいはゲネサレト湖とも呼ばれます。

その名の通りガリラヤにありますから、エルサレムを引き上げて、こちらへ来てしまったのでしょうか。それとも一時的な、旅行でしょうか。ガリラヤはほとんどの弟子たちの故郷です。

ここにはペトロ、トマス、ナタナエル、そしてゼベダイの子であるヤコブとヨハネ、そして名前が記されていない二人の弟子という、七人の弟子たちがいました。

ペトロが「私は漁に行く」と言うと、ほかの弟子たちも皆、それについて行きました……。とても、使命を帯びた者たちの、華々しい振る舞いには見えません。どういふことなのでしょう。

結局、弟子たちは根本的なところで、まだ十字架とその悲しみがもたらした恐れや苦しみ、悩みから、完全には立ち直っていなかったのでしょうか。霊肉において、本当に立ち直るにはまだ、時間が必要であったようです。

そして、このことで、弟子たちは決して責められてはいません。弱さを、主はご存

知です。

この個所からは、私はとても牧歌的な雰囲気を感じます。私が十年以上前、まだ南浦和教会に赴任する半年ほど前に、一度、南浦和教会で説教をしたことがあります、その個所が今朝の個所でした。

それは、この聖書個所が個人的に好きだからです。ここには、主イエス・キリストと弟子たちの（それはつまり主と私たちとの）、少しユーモラスな点も含めて、親しい交わりがあります。

見方によっては、弟子たちはなぜ、こんなところでのんびり魚なんか釣っているんだ。頑張っただけで伝道のため外に向かって行かなければだめではないか、というようなこともあるかもしれない。

しかし、当のイエスさまが、ここで弟子たちに対して、少しもそのようなことは言われていません。彼らをそのままに受け入れておられます。ここに流れている空気は、親しく、麗しいものです。主と弟子たちとの、落ち着いた、そして着実な命の交流があります。

弟子たちが、本当に伝道に向かって走り出すことができたのは、ペンテコステの時に聖霊を受けてからですね。

《2》

さて、漁に出て行った七人の弟子たちですが、その夜は何もとれなかった。

既に世が明けたころ、主が岸辺に立っておられました。しかし、弟子たちにはそれが主であるとは、わかりません。

舟から岸まで 200 ペキスほど離れていたとあります。度量衡の表に 1 ペキス 45 センチとありますから、90 メートルほどになります。夜が明けたころ、ということですから、まだ少し薄暗かったかもしれませんが、90 メートルほどであれば、目のよい人ならば恐らく、わかるのではないのでしょうか。

しかし、まさかイエスさまがおられるなどとは彼らの誰一人も思わなかったでしょう。それで、わからなかった。

イエスさまは、進んで彼ら弟子たちに呼びかけられます。「子たちよ、何か食べる物があるか」。

弟子たちが何もとれていないことはご存知ですが、主はまず、このように話しかけられています。なお、「子たちよ」という言葉ですが、これはふつう、幼児とか子どもを指す言葉です。

弟子たちを、イエスさまが、ギリシア語でこの言葉（パイディア）で呼ばれているのはここだけです。これは父親らしい親密さを込め呼びかけになっています。

弟子たちの「ありません」という答えに対して、主はさらに言われました。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ」。

そのとおりにすると、魚があまりにも多くて、もはや網を引き上げることができないほどになった。

奇跡が起こっています。この奇跡は、きっと、かつての同じような奇跡を、弟子た

ちに思い起こさせたに違いない。

それはルカによる福音書 5 章にある、ペトロたちがイエスさまに従うようになる、そのきっかけとなった奇跡です。

場所も同じゲネサレト湖畔でした。ペトロに向かって、主は、沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をしなさい、と言われます。

ペトロは言います、自分たちは夜通し苦労したが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、と、言われるとおりに網を降ろします。すると、おびただしい魚がかかり、網が破れそうにまでなった。そこで、もう一艘いる仲間に助けてもらいますが、二艘の船は魚でいっぱいになり、沈みそうになったとあります。

ペトロは、「主よ、私から離れてください。私は罪深い者なのです」と言いますが、主は言われます。「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる」。

こうして、ペトロはすべてを捨てて主に従いました。ヨハネたちも同様です。

あのときの、あの奇跡と同じ奇跡。それが今また、起こっています。

さて、このとき主の愛しておられた弟子が、「主だ」と叫びます。この弟子はヨハネその人でしょう。

彼は、岸辺の人物を目で見て、ようやくイエスさまであることがわかったというのではないでしょう。この奇跡を目の当たりにすることによって、この奇跡を起こされる御方はイエスさま以外におられない、とわかったに違いない。

ペトロは、ヨハネの叫びで、すぐ行動に移るのですが、やはり彼も、この奇跡を見たことによって、イエスさまに違いないとわかったのでしょう。

彼は上着をまとして湖に飛び込みました。ふつう考えられることと逆のことをしていますが、裸同然でイエスさまの前に出るのは恐れ多いと感じたわけですね。

また、ほかの弟子たちは舟で岸へと戻って行きました。船で行くのと、泳いで行くのと、どちらが速いか。よくわかりませんが、ペトロはそのようなことを考えるまでもなく、すぐに飛び込んでしまった。いかにもペトロらしい行動です。

《3》

陸に上がってみると、炭火がおこしてあり、その上に魚がのっていました。パンもあります。イエスさまみずから、用意してくださっています。信仰のことでは、すべてイエスさまが、私たちよりも先に、必要なことをしてくださっています。

「今とってきた魚を何匹か持って来なさい」と主が言われると、ペトロが舟に乗り込み、網を陸に引き上げました。すると網には 153 匹もの大きな魚がかかっていた。

なぜ、153 匹なのか。このような数字が挙げられている場合、大きく二つの考え方があります。

一つは、とにかく実際に 153 匹とれたのだから、そのとおりの 153 匹と書かれているというものです。素晴らしい奇跡が起こったので、どれだけの魚がいたか、丁寧に数えたのでしょう。

別の考え方では、この事実の 153 という数字には、抽象的な意味が隠されている、

といいます。

その抽象的な意味は、いろいろ考えられてきたようですが、たとえばヒエロニムスという5世紀から6世紀にかけて生きた教父(正統的な信仰・教えを伝え、打ち立て、実践した人)がいます。カトリック教会の公認聖書となっている、ラテン語のいわゆるヴルガタ(一般の、すべての人々に知られた)と呼ばれる聖書がありますが、そのほとんどを翻訳した人です。ヘブライ語、ギリシア語から訳しました。

彼は153について、当時の世界で知られている魚は153種類であった、と言います。それで、153匹というのは全種類の魚、つまり、世界中のあらゆる人々のことを意味している、と言います。

まさに人間をとる漁師になったペトロたちは、その働きを通して世界中の人たちを福音という網の中へすくい上げることになる、というのです。

知られている魚が当時153種類であったというのは、確かめようもありませんが、それはともかくとしても、世界中の人たちが主イエス・キリストによる救いへと入れられている、招かれているという解釈は、魅力的ですね。

そして、この網は破れていなかった。主イエス・キリストは、そして教会は、すべての人を包み込んで、そして破れることはありません。主イエス・キリストにあって私たちは一つです。永遠の命のうちに、いつまでも守られ、生かされています。

さらに主は言われました。「さあ、来て、朝の食事をしなさい」。

弟子たちは、誰も「あなたはどなたですか」と問いただそうとはしなかった。主であることを知っていたからです。彼らはここでも、思い出している出来事があったでしょう。――

一つは、かつてティベリアス湖の向こう岸で、主が山(といっても丘)に登られ、そこで大人の男だけでも五千人の大群衆に対して、大麦のパン五つと魚二匹とをもって、彼らを満腹させられたこと。

もう一つ、これはつい最近のことと言ってよいですが、最後の晩餐ですね。

これらのことを思い起こし、彼らは何も語ることなくして、その心には大きな喜びが溢れていたことでしょう。

この食事は、もちろん今の聖餐式につながるもの、それを指し示すものと言えます。

私たちは聖餐にあずかるたびに、喜びに満たされます。主イエス・キリストの祝福が、私たちを喜びに生かしてくださいませ。

ティベリアス湖畔で弟子たちに現れてくださった、復活の主イエス・キリストは、弟子たちに、ひたすら祝福を与えてくださっています。多くの魚がいる場所を教えられたこと、実際に大漁であったこと、食事を用意されていたこと、共に食事をされたこと…。

この祝福の中で、暫くの時を過ごし、やがて聖霊が力強く彼らに降った時、彼らは本当に力ある証し人、御言葉を宣べ伝える者として、世界に向かって出て行くこととなります。

まず主の祝福があります。祝福に生かされています。そして、どこまでも主の祝福は私たちと共にあります。

詩編 119 編 1 節「いかに幸いなことでしょう。まっただ道を踏み、主の律法に歩む人は」。

福音に心開いて、主の祝福にあずかり、主に従いゆく私たちの幸いが、ここで歌われています。

主イエス・キリストの祝福が、絶えず私たちを、生かしてくださいます。

2021 年 7 月 25 日 朝拝

恵み深い天の父なる神さま、尊い御名を崇めます。

復活の主イエス・キリストは、親しく弟子たちに現れてくださり、祝福をもって彼らを生かし、励まし、導かれました。

私たちも今、天におられる父なる神さまと主イエス・キリストにより、そして私たちに内住してくださる聖霊によって、絶えず恵みと祝福のうちに生かされています。この幸いを覚えて、心から感謝いたします。

どうか、教会と私たち一人一人の歩みを、あなたがさらに清め、導いてください。祝福をもって、その歩みを支えてください。

世界中の人たちに向かって告げられている福音を通して、どうか、さらに多くの人たちが救いへと入れられますように。

御手に委ねて、主イエス・キリストの御名によって祈ります。

大場康司